

## マルグリット・ブルジョワの心を求めて

中本敦子CND  
マリア管区

2014年3月

私はコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の会員です。2013年4月1日から1年間の任命で日本からモンリオールの母院国際共同体に来ました。

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の日本での歴史を簡単にご紹介しましょう。1932年に5人の会員を日本に派遣し、現在日本でのミッションは82年目を迎えています。東北地方のカトリック教会を当時束ねていたカナダのドミニコ会出身の司教様の要請を受け、最初のミッションナリーたちは福島市に居を定めました。福島市は農業中心の小さな田舎町で、フランス語系のシスターたちの言葉を理解する人もわずかでしたが、小さなカトリック教会に集まる信者さんたちをはじめ、地域の人たちに温かく迎えられたそうです。第二次世界大戦の始まる直前でしたが、シスターたちは修道院を建て、幼稚園を始め、宣教活動を行っていました。1941年太平洋戦争勃発後、修道院は軍に没収されて外国人捕虜の抑留所となりました。シスターたちは、福島の内陸部の会津に移動させられ、軟禁生活を余儀なくされました。シスターたちは外部との連絡もできず、窮乏生活を送りました。このとき、シスターたちの生活を支えたのは3人の日本人志願者でした。日本人司祭たちから何度となく、退会を勧められていたにもかかわらず、3人はコングレガシオンに留まり続け、ひそかにシスターたちに食糧や必要なものを差し入れし、共に祈り、平和が訪れるのを待ち続けました。無原罪聖母の祝日に始まった戦争は、1945年の聖母被昇天祭に終わりを告げました。シスターたちは誰ひとり欠けることなく福島に戻り、戦災孤児たちを引き取って翌年には小学校を開学したのでした。その後も、さまざまな形で教育活動を展開し、現在CNDは日本で福島市に幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学、東京に幼稚園と女子寮、北九州市に小学校・中学校・高等学校を持ち、70人を超えるシスターたち（カナダ人7人を含む）が宣教活動を続けています。

私は日本人には珍しい幼児洗礼の信者で、カトリックの家庭に育ち、北九州にあるCNDの学校で12年間、東京の女子寮で4年間を過ごしました。小学校入学後、6歳のときに創立者マルグリット・ブルジョワに出会いました。16年間の中で最も印象に残っているのは、アイルランド系カナダ人シスターの明るく親しげでいつも変わらず絶えることのない優しい笑顔です。

修練院で「最初に来日したシスター」のお一人からCNDの歴史と音楽を学びました。その方から直接、来日されたときや戦争中のご苦労を伺うことはありませんでした。けれども、言葉の端々から、創立者、聖母マリア、イエスへの愛を強く感じました。シスターの日々の生活を見ていて、なぜ厳しい苦難に耐え、日本に留まり続けたかという理由を理解しました。神様がそう望んでおられたから。マリア様が共にいてくださったから。マルグリットなら、留まることを選んだから。この方の生涯にマルグリットの生涯を重ねることで、マルグリットの偉大さを理解できたように思います。初誓願を宣立するとき、その1年2カ月前に亡くなられたこの姉妹の十字架をいただきました。

誓願宣立後、福島と北九州の学校で国語の教師として働きました。生徒たちとの関わりは忙しいながらも充実した日々でした。特に、高校入試で失敗して入学してきた生徒たちが、CNDの学校で温かく迎えられ、「あなたは私の目に価値高く、貴い」という聖書の言葉に触れ、自尊心を取り戻して生き生きと学校生活を送るようになる様子を見るのは、大きな喜びでした。しかし、時々、ふと思ふことがありました。一般の先生方と修道女の自分との違いは何だろう、と。私は入会前にも教師としてプロテスタントの学校で働いた経験がありました。熱心な一般信徒の教師たちが、毎朝の礼拝で福音を語り、教科を教え、生徒を指導していた姿をたくさん見ていました。その方たちと自分の違いは？と考えたとき、何か自分の中に行き詰るものを感じることもありました。母院で1年間過ごす任命をいただいたとき、この「行き詰まり」を打開できる機会かもしれないと思いました。

滞在中、私は地図を片手にモンリオールの街を歩きました。モンリオールの歴史を語る博物館、ボンスクールはじめ数々の教会、創立者の住んだオールドモンリオールの地域、姉妹たちが宣教活動を行った塔など。多くの教会にマルグリットの肖像画や像があり、どれほどこの聖人がモンリオールで親しまれているかを実感しました。歴史や考古学の資料を目にすることで、マルグリットがカナダに来た当初の生活状況の厳しさを改めて理解することができました。

マルグリットがモンリオールに到着した11月16日にオールドモンリオールの港近くを歩きました。冷たい空気、木々のほとんどが葉を落とした寂しげな景色。その後に迎えた冬の厳しさ。手記や伝記を読み返し、孤独、不安を行間を感じるように思いました。フランスの故郷で私的な誓願を立てて自己を奉献し、奉仕活動にいそしみ、充実した生活を送っていたマルグリットが、そのすべてを捨ててカナダに来た。そして神様の望みに従って、人々のために必要とされている奉仕に携わり、何より身を持って福音を告げ知らせ続けた。仲間を集め、修道会を設立した。これが途方もないことである、ということが、しみじみと実感できました。

国造りのために素晴らしい事業を行った人は、世界中にたくさんいます。マルグリットの偉大さは、事業に留まらず、修道会を作ったことだと私は思っています。手記の中に「恋びとの愛」という表現があります。まさに、その愛でイエスを愛していたから、イエスとのみ結ばれること、「子を想う情に燃える母親が片時もわが子から目を離すことができないように、絶えず神と共に生きる」ことをマルグリットは望んでいました。その彼女にとって、修道生活を望むのは自然なことでした。また、聖母マリアを愛し、マリアによって召し出された彼女は、マリアのように、人々の中で共に生きること、奉仕すること、福音を告げることを望みました。自分一人ではなく、志を同じくする人々と共に生きることを望んだのは、共同体として「この世における生きた証し」となることを望んでいたのではないかと、思います。「すべてに越えて神を愛し、自分を愛するように他人を愛しなさい」という掟がすべての人の心に刻まれることを創立者は願いました。

また、さまざまな使徒職に携わる姉妹との出会い、改めて創立者の心に触れることができました。姉妹たちが自分で識別し、仕事を見つけ、働くという過程を経る中で、「創立者のカリスマに誠実に生きる」ことをどれほど大切にしているか、ということを感じました。自分との対話、長上との対話、イエスとの対話、マルグリットとの対話を通して、「今、自分はどこに、何に呼ばれているか」を考えねばなりません。一人の人間としての成熟、修道者としての霊的な成熟とカリスマへの理解と情熱が必要だと思いました。

私はCNDの学校という守られた環境の中、もともと教師をしていたこともあり、よく知っている仕事をこなすうちに、「何のためにここに私は派遣されているのか」を見失っていたのだと思います。イエスへの愛を胸に、「あなたは神に愛されたかけがえのない、大切な存在なのですよ」というよき知らせを言葉と行いで伝えること。マルグリットの望んだように姉妹同士、また共に働く方たちと温かい関わりを作ることを通して、愛の掬を世に見えるものとしていくこと。徹底的に、その奉献を貫くこと。それが、私の派遣の意味であり、初期のミSSIONナリーたちが、まさに命がけで伝えようとしてくれたものだと思います。

ミSSIONナリーたちは、日本にたくさんの贈り物を持ってきてくださいました。福音、マルグリットの心、教育活動、修道生活。私はカナダに来ていただいたものはたくさんありますが、何をカナダにもたらしたか、と考えると、心もとない気がします。一つ、確かなことは、福島のことを伝えることができた、ということです。

2011年3月11日に起きた東日本大震災が起き、福島のCNDの最初のミSSIONナリーたちが建てた修道院も被災し、壊さざるを得ませんでした。そして福島県の原子力発電所で大きな事故が起こり、福島の人々は地震や津波に加えて放射能汚染による被害を受け、今もその状況は続いています。子どもたちが被曝することを恐れて避難させる家庭もあり、私たちの学校からも生徒が多く避難し、特に幼稚園は40%の子どもが転出しました。その中で、福島のシスターたちは、「マルグリットが今福島におられたら、どうするか」を考え、さまざまな活動に携わっています。まず、被災した子どもたちを支える奨学金を立ち上げました。そして残った子どもたちのために、地震で破壊された幼稚園を建て直しました。その中には、子どもたちが汚染された空気に触れず安心して遊べるように、ガラスの壁で覆われた広い室内遊技場があります。教会学校の子どもたちを夏に保養させるプロジェクトを他の司教区と協働して立ち上げているシスターもいます。また、仮設住宅で暮らす人たちのために傾聴ボランティアを養成するプログラムを作ったシスターもいます。今、誕生したボランティアたちと定期的に仮設住宅を訪れ、人々の思いを聞き、同伴する日々を過ごしています。先の見えない生活で将来の不安、子育ての不安を抱える特に女性の心の支えとなっています。

私は昨年の夏、修道会内の社会正義ネットワーク委員会に、日本管区の代表として出席しました。そのとき、福島のシスターたちから送ってもらったパワーポイントを紹介し、今の福島の状況とシスターたちの取り組みを説明しました。「福島の人々と共にCNDは留まる」というメッセージを受け止めたアメリカ管区の姉妹やアソシエートが、福島支援のためのプロジェクトを立ち上げてくれました。これは、福島の姉妹にとって大きな心の支えとなっています。その経緯に直接関わる中で、姉妹たちの思いの中にマルグリットの「他者への共感」をまざまざと実感しました。私にとって、世界のCNDと自分がつながっている実感を持てた関わりとなりました。

4月から福島に派遣されます。情報を発信し、福島と北米のCNDとをつなぐ仕事を継続していきたいと考えています。そして、「マルグリットの心」を自分の中に抱いて日本に帰りたい、と思っています。